

新聞活用教育（NIE）の力を育成する 大学の教員養成課程での授業実践

柏 崎 秀 子

1. はじめに

新しい学習指導要領のもと、教員は「生きる力」の育成や、思考力・判断力・表現力の育成、そして、言語力の育成などに力を注ぐこととなった。また、PISA 型学力に象徴されるように、単なる知識・技能の習得ではなく、知識や技能を実生活の様々な課題に活用できる能力を育てることも求められるようになった。その一環として、新聞を教材として教育に活用する動きが高まり始めている。新しい学習指導要領において、各学校種で「新聞」が指導すべき内容として明確に位置付けられ、多くの教科に盛り込まれることとなった。NIEと呼ばれる新聞活用教育は、新しい学習指導要領のもとで展開される教育のねらいを現実化することに有効である（影山，2008）、とされている。

そのような教育の在り方の変化を受けて、教育現場に教員を送り出す側である大学の教員養成課程も、教員志望学生に対して、新たな教育重点事項が指導できる能力の育成が重要となろう。筆者は教員養成課程にて、そのための取り組みを授業に取り入れている。本稿では、まず NIE を概観したうえで、新聞活用教育が行える教員を育成するために実施した幾つかの取り組みを報告する。

2. 学校教育における新聞活用

2-1. NIE（新聞活用教育）の目的

NIE とは、Newspaper in Education の頭文字を取ったものであり、「教育に新聞を」「教育における新聞活用」などと称されるように、新聞を活用して教育活動を推進することを意味する。

日本新聞協会によると、NIE 運動は 1930 年代にアメリカで始まり、以後、世界に広まり、2011 年 1 月現在、世界 74 か国で実施されている、という。日本では 1985 年に開かれた新聞大会において提唱されたのが始まりとされる。日本では、教育界と新聞界が協力する体制をとり、日本新聞教育文化財団によって推進されるようになり、2011 年 3 月には新聞財団が新聞協会と合併し、NIE 事業は新聞協会で引き継がれて、今日に至っている。

従来の授業でも、新聞記事を教材として教育に活用してきたが、それは、新聞の切り抜きを補助

教材にすることが中心であったのに対し、NIEでは以下のような相違点が特徴として挙げられる。①新聞を1面から最終面まで、記事や写真、広告まで丸ごと活用する、②複数の新聞を読み比べる、である。また、児童生徒自身が新聞作りを行ったり、新聞各社の記事を比較して読んだり、新聞記事のスクラップ作りや新聞への投書などと、多様な活動へと広がっている。新聞を授業に活用することによって、児童生徒の主体的な学習能力が向上することが、日本新聞教育文化財団NIE委員会によるNIE効果測定調査(2006)から導かれている。すなわち、児童・生徒達が「文章を読むこと」「自分で調べて詳しく知ること」「他の人の意見を聞くこと」が好きになり、「新聞を進んで読むようになった」「自分で調べる学習態度が身についた」という。

新聞を活用するとすると、ある程度の年齢に達している必要があるのではないかと思われがちだが、小学校から中学、高校へと、発達段階に応じて活用する実践も提案されている(日本新聞教育文化財団,2006)。たとえば、小学校低学年:「新聞から知っている文字を探し出す」、小学校高学年:「プロ野球の記事から打率を計算したり、商品の割引広告に出ている数字からメーカーの希望小売価格を計算する」、小・中・高校:「各紙面にわたってクラス全員で考えてみたいテーマを手分けして探し出し、ディベートの素材にする」などである。今後、各学校種に適した活用の仕方を一層検討することが期待されている。

2-2. 新学習指導要領とNIEの関わり

新学習指導要領・総則「教育課程編成の一般方針」において、その要点が、小学校・中学校・高等学校すべての学校種で、同様の記述となって現れている。それは、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題解決するために必要な思考力・判断力・表現力の育成、③主体的に学習に取り組む意欲・態度の育成・確立、④言語活動の充実、である。

このように、PISA型学力に象徴されるように、単なる知識・技能の習得ではなく、知識や技能を実生活の様々な課題に活用できる能力を育てることも求められるようになった。なかでも、言語活動の充実は、学習活動や論理的思考、コミュニケーション、感性・情緒の基盤として、国語はもちろんのこと、各教科・学校全体で展開されることが求められており、新たな教育改訂の中核ともいえる(柏崎,2010)。

その一環として、新聞を教材として教育に活用する動きが高まり始めている。新しい学習指導要領において、各学校種で「新聞」が指導すべき内容として明確に位置付けられ、多くの教科に盛り込まれることとなった。言語活動の例として新学習指導要領では、感想・意見の記述・表明、読み比べなどの活動が挙げられているが、これらは新聞記事の活用例と重なる。主体的に新聞から情報を得て、自ら思考し表現することによって、思考力・判断力・表現力が育成されることが期待される。また、「学習意欲」の育成に新聞活用教育が有効であることは、上述の調査結果からも指摘されている。新聞活用の推進には、このような背景があるものと思われる。

新学習指導要領の記述には「新聞」「報道」などの言葉が随所に挙げられており、これからの教育で新聞を活用することが意図されていることが明確に示されている、といえよう。たとえば、次のような記述がある。中学校・国語では「本の表題や目次、索引等から判断したり、新聞の紙面構成等に基づいて、必要な部分を探して読んだりするなど、それぞれの資料の特性を活かした読み方

をすること」、中学校・社会では、「新聞、読み物、統計その他の資料に平素から親しみ適切に活用すること、観察や調査などの過程と結果を整理し報告書にまとめ、発表することなどの活動を取り入れるようにする。」（下線は筆者）

なお、最近では、小学校・中学校・高等学校の各教育現場に加えて、大学教育においてもNIEを導入する報告が増えつつある。たとえば、経営経済学系の学習では「生きたテキスト」として新聞を活用したり、マスコミュニケーション論の授業では新聞をもとに情報読解教育を行ったり、教員養成系の道德教育では身近な素材の収集源として新聞を活用する、などが挙げられる（日本NIE学会、2008）。福祉教育でも活用し、受講生の大半が授業での新聞活用を肯定的に捉えた報告（山村、2011）もなされている。

このような状況下において、これからの教員は新聞活用教育を推進できる能力が求められるようになるであろうし、大学の教員養成課程においても新聞活用教育の能力を育成する必要があるであろう。いかにその能力育成の教育を行うかを検討すべきであろう。

3. 教師教育のためのNIEの取り組み（先行研究）

上述した学習指導要領での新聞活用の言及、そして、教育現場でのNIEの高まりに対して、教員を送り出す側である大学の教員養成課程も呼応する必要があるであろう。教員志望学生に対して、新たな教育重点事項が指導できる能力を育成することが今後の重要な教育課題となるべきだと考える。

これまでも、大学の教員養成系の授業で地道な取り組みがなされてはいる。平石（2007）では教員養成課程でNIE入門講座を行ったうえで、附属中学校と連携して教育現場のNIE授業にも参加し、NIE授業の有効性や魅力を実感させる実践が報告されている。福井・庄本・宛（2012）では、教員養成の中でも社会科の教育に焦点化して、NIE授業を実践できる能力を育成する講義計画を示している。小田（2008）は教職課程の道德教育の授業で、教材開発の視点で新聞を活用する活動を行っている。また、教科教員だけでなく、学校図書館の司書教諭が核となって行うNIEの在り方（前田・徳田、2012）も検討されている。

さらに、教育現場でキャリアを積んだ教員の研修においても、NIEを取り入れた活動が見られ、たとえば、愛知教育大学では教員免許更新講習で、受講教員がNIEを体験する講座を開講した（土屋・服部・原田・市川、2010）。

このような意欲的な取り組みはまだ緒についたばかりである。今後、教育現場で活用型の教育を推進するために、教員志望学生に対してNIE指導できる能力を育成する教師教育を、教員養成課程で再構成していくべきであろう。

4. NIE実践力養成のための授業実践の取り組み

筆者はこれまで大学の教員養成課程において、言語力育成やNIEなどの、これからの教員に求められる新たな教育課題に対応できる力を養成しようと取り組んでいる（柏崎；2009、2012）。そのひとつとして、教員養成課程の「総合演習」（通年、2年生以上対象）の授業の一部で、ここ数年来、NIE実践力養成のための試みを実施してきた。まず、新聞に親しむことから始めて、新聞を読む習慣付けを行い、新聞記事に関心に応じてピックアップし内容をまとめる活動、各自のテーマで壁新

聞を作る活動等を経て、新聞の教材化へと、歩みを進めてきた。ここでは、これまで実施した幾つかのNIE実践力養成の取り組みを報告する。

(なお、以下に挙げる取り組みはすべてを通年授業で行ったわけではなく、年度によって、いずれかを組み合わせて実施した。当初は前半が中心で、年度を重ねるにつれ、後半が追加された。)

4-1. NIE 授業の学習者としての体験作り

第1の取り組みは、受講生にNIE授業の学習者としての経験を持たせることであった。「総合演習」の授業で、筆者が環境問題に関する新聞記事を教材に取り上げて、NIE授業を実践した。

【受講生の活動】

- ① 教材の新聞記事を読み、記事にどのような問題が書かれているか見つけた。
- ② 見つけた環境問題について、各自が口頭で指摘した。
- ③ 記事は分割されて受講生各自に割り当てられ、それぞれについてわからない語句を調べた。
- ④ 担当箇所の記事および語句について、発表形式で説明を行った。
- ⑤ 各自が深めたい問題を決めて、文献などで調べ、結果を発表した。
- ⑥ 実施した一連の取り組みについて、筆者が作成した振り返りシートに記入して、振り返った。

振り返りシートの記述から、以下の傾向が導かれた。②からは自分の知らない環境問題が多様にあることに気づいた、③と④によって、知っていると思っていた問題でも知らない内容が多く含まれていることや、細かな専門語句までは知らなかったことに気づいた、⑤によって、知識伝授ではなく自分で調べる学習の困難さや面白さなどを認識した、などであった。一方、⑤では文献に基づいてまとめることがうまくできず、単に丸写ししただけであったり引用が不適切であったりした者も少なくなかった。そのため、この活動の後、文献の引用の仕方やまとめ方について補う学習を行った。

さらに、日頃、受講生が新聞をあまり読んでいないことが判明した。新聞の教育への活用を検討する以前の状況にあることを筆者は認識し、次なる展開を考えた。

4-2. 新聞に親しむ経験作り

第2の取り組みは、教員養成課程の受講生に、新聞に親しむ経験を作らせることであった。新聞を教育に活用できるためには、その基礎として、日頃から新聞を読む習慣を有することが不可欠だと考えたからである。まずは読者として新聞を読む目を持ち、そのうえで、教員を目指す者として新聞をいかにして教材に活用するかを検討できる能力が積み上げられるだろう。昨今の大学生は新聞を読まない傾向にあると指摘される(日本新聞教育文化財団, 2006)が、本学の学生も同様で、受講生に尋ねたところ、そもそも新聞を購読していなかったり、家に新聞があってもほとんど読んでいない者が多かった。テレビのニュースで社会情勢を把握できていると認識したり、インターネット上でニュースのトピックを見れば十分で、新聞を読む必要性を感じない者が過半数を占めた。そこで、NIE授業ができる教員への一歩として、新聞に親しむ経験を作る活動を行った。

【受講生の活動】（①～③は夏休み期間を利用した）

- ① 毎日、新聞を読むようにした。
- ② 新聞から、環境問題および教育問題に関する記事を各3件以上ピックアップした。
- ③ ピックアップした記事について短い要約（100字以内）と読んだ感想を書いて提出した。
- ④ 最も関心を持った記事に関する要約と感想について、A3サイズでポスターを作成した。
- ⑤ ポスターの内容を口頭で説明して、フロアからの質問に答えた。
- ⑥ フロアの受講生は関心を持ったポスターに、思ったことを書き入れた。
- ⑦ 一連の活動を振り返って、振り返りシートに記述した。

振り返りの記述からは、「新聞を読む宿題が出たことで新聞を読むようになった」「読む習慣ができたことで、宿題に限らず広く新聞に親しむようになった」等と回答した受講生が多く見られた。③で、要約を簡潔に書くことが難しい受講生もあり、長すぎたり短すぎたり、記事の要点をうまく把握できていなかったりする者もいた。また、要約と感想の書き分け、つまり、事実と意見の違いを十分に区別できないケースも散見された。事実と意見の違いについては、新学習指導要領で求められる言語力の中でも、学習すべき事項に挙げられており、学習の必要性を再認識させられた。④のポスター作成は、受講生にとって初めての経験だった者も少なくなく、どのように書けばよいか戸惑いが見られた。レポートとして提出する場合と違って、ポスター形式で読みやすく簡潔にまとめるにはどうしたらよいか、筆者は個々のポスターを比較しながら受講生に問うようにした。受講生は、他者との比較によって、よりよい表現を自ら考え、主体的に学びとろうとしている者がいたが、他方、気づきにくい者や気づきを言語化しにくい者も見出された。この活動あたりで、主体的な学びの面白さを認識できるか否かが分かれるようであった。

4-3. 受講生による新聞作成活動

新聞に馴染んできた受講生が、今度は自分達で壁新聞を作成する活動に取り組んだ。情報の読み取りだけでなく、積極的に受講生自ら情報を調べ、まとめて、発信する力を養成することをねらった。さらに、壁新聞にまとめることで、レポート形式で文章化する場合とは異なる、視覚的な訴え方ができるようになることも意図した。まず、筆者がこれらのねらいを説明して、どのようにまとめれば、見てよくわかるようにできるかを考えさせた。ここでは、受講生が4人前後のグループに分かれて、共同で作業を行うこととした。

【受講生の活動】

- ① グループに分かれ、それぞれが取り上げるテーマについて話し合っ、決定した。
- ② グループ内で編集計画を考え、メンバー各自の担当内容を決めた。
- ③ 担当毎に、調べ学習や編集などの作業を行った。
- ④ 模造紙を使って、壁新聞の形にまとめた。
- ⑤ 各グループがそれぞれの壁新聞の前で発表を行い、フロアともやりとりをした。
- ⑥ 一連の活動を振り返って、振り返りシートに記述した。

振り返りの記述から、受講生は仲間とともに作業することについて多くの気づきがあったことが導かれた。主に、以下のような点が挙げられた。

- ・共に作業することで、他者の考え方や作業の仕方を知ることができて参考になった。
- ・それぞれが異なる考えや異なる進め方があるけれども、グループでひとつにまとまる必要があるため、よく話し合うことができた。
- ・話し合いの過程で、他者の意見によって、自分の考えの不十分さや確かさを再認識できたり、自分の考えを理解してもらうにはどうしたらよいかよく考えたりした。
- ・共同で作業することは非常に楽しかった。
- ・人間関係が深まった感じがした。
- ・異なる考えを持つ者と共に作業する難しさを感じた。

以上から、NIE 授業で行われる新聞作成について、受講生自身が体験したことによって、新聞作成という授業で求められる学習項目を自ら見出すことができたといえよう。ただし、まだ学習者側の視点であって、教師側の視点にまでは至っていないこともうかがわれる。これらの経験を活かし、教師側の視点で活動や授業を捉える目を養っていく必要があるだろう。

4-4. 新聞活用の仕方に関する学習（新聞活用法の文献を読む活動）

今回は、教師側の視点で活動や授業を捉える目を育成するために、受講生に教師側を意識させる活動を行った。すなわち、新聞をどのように活用して授業を行うか、について学習することを試みた。それは、本来なら、授業でいかに新聞を活用するか、新聞の教材化について受講生が具体的に考えることができる、ということが到達目標であるはずだが、受講生がすぐに教材化の案を考えつくことは現段階ではまだ困難と思われたからである。実際、筆者が活動前に受講生に新聞の活用・教材化を尋ねたところ、案が出ないか、教科書に関連する記事を配るような案が出た程度であった。そこでまずは、授業モデルを知ることによって、学習の構えを作ることにした。

この活動では、新聞活用の仕方が書かれた文献を筆者が提示し、受講生が分担箇所を決めて読み、その内容を発表することとした。使用した文献は『新聞を授業に活用する』（朝日新聞社）であった。

【受講生の活動】

- ① 文献の担当したい箇所を決めて、受講生各自が読んで要点をまとめた。
- ② 担当の内容に関連して、それを自分ならどのように応用・発展できそうかを考えた。
- ③ 分担箇所の内容について、講義するように、他者の前で発表して説明した。
- ④ 聞き手は、まとめシートにメモし、かつ、発表へのコメントを行った。

活動以前は、新聞の活用・教材化と言われても、受講生は単に教科書に関連する記事を配るような案を出すに過ぎなかったのだが、④の記述から、この活動によって、新聞の活用の仕方が実に多様にあることに気づくことができたことがうかがわれる。ただし、②の自分なりの応用・発展については、具体的に教科教育でどう活用するかを考えることができた者がいた一方、全く思いつかな

い者もいて、発想には個人差が大きかった。教科教育法の既習状況および学習の深さによって、授業のアイデアまで考えられるかどうかには差が出たように思われる。

4-5. 新聞を活用した授業案作成および模擬授業の実施

これまでの学習の集大成として、受講生自身が新聞を活用した授業案を作成し、さらに、その授業案に基づいて模擬授業を実施した。活用授業例を学習したことによって、構えが形成されたときのみならず、教師側から授業を捉える目をさらに育成することをねらった。

【受講生の活動】

- ① 受講生各自が取り上げたいテーマを考え、教材となり得る新聞紙面を探す。
- ② おおまかな授業案をまとめて、指導者と詳細を相談する（個別対応）。
- ③ 授業案を学習指導案の形にまとめる。
- ④ 学習指導案に基づき、模擬授業を行う（ひとり25分程度）。
- ⑤ 模擬授業後、生徒役の受講生は模擬授業に関してコメントシートに記入する。
- ⑥ 一連の活動を振り返って、振り返りシートに記述する。

この活動の実施は2011年度後期で、参加受講生は8名（4年生が4名、3年生が4名）、内訳は7名が家庭科免許を、1名が国語免許を取得希望であった。今回はそれぞれが免許取得しようとする教科の授業案を考えた。受講生の模擬授業の概要を表1にまとめた。受講生が用いた新聞紙面の箇所は、いずれも記事の箇所であり、写真もしくは挿絵が付いていた。写真だけを取り上げたり、広告を用いたりするケースはなかった。NIEでは新聞紙面の用いる箇所は1面から最終面まで、記事や写真、広告まで、丸ごと活用する、とされているが、やはりまず受講生はこれまで通りに、記事自体の活用を考えたことがわかった。新聞記事を活用するといっても、用い方は様々であった。新聞記事自体を授業の中心に据えた授業案もあれば、導入部分で用いてテーマへの先行オーガナイザーの役割を持たせた案や、教科書の学習を補足する参考資料として用いた案も見られた。

どの受講生も実施時期頃に掲載されたタイムリーな新聞記事を用いていた。実際の授業を考えた場合、タイムリーな記事であれば、授業を受ける児童生徒が読んでいたり、その話題を耳にしたりする可能性が高いことになり、関心を寄せやすいのではないかと思われた。用いた記事の数は、ほぼすべての授業案で1つだけであったが、受講生Eの事例だけは関連する3つの記事を組み合わせ活用しており、興味深い。さらに、受講生Eの案では用いるタイミングも、授業過程の特定箇所だけでなく、導入部分と発展部分に分かれていた。新聞を中核に据えて授業展開を考えた事例といえよう。また、ほとんどの受講生が独自のワークシートを作成して、新聞を活用する際に共に用いていた。これは、新聞を単に教科書の補足資料として示すことに留まらず、積極的に授業の教材とみなして活用しようとしたことの現れではないだろうか。

表 1-1 受講生が作成した新聞活用による授業案の概要

受講生	テーマ	活用した新聞の箇所	授業の進め方
A	健康と食生活	「『痩せ』って いいの?」 朝日新聞の記事+写真 2011年10月1日付	導入で様々な体型を示しながら、「痩せ」と綺麗な関係を日頃いかに認識しているかに気づかせてから、新聞記事を読ませ、「痩せ」の問題点を話し合わせた。その後は、BMIを計算して自分の身体の状態を知り、摂食障害の話題へと発展する計画であった。
B	主体的に 学習しよう ～要約から討論へ～	「年の差婚 男女の事情」 朝日新聞の記事+写真 2011年10月12日付	導入で「なぜ新聞を使って要約するか」を説明し、その後、要旨や意見文の作成方法について既習した内容を復習してから、新聞記事を配布し、重要事項をチェックさせながら読ませた。ワークシートを用いて新聞内容の要旨の作成、さらに自分の考えをまとめさせ、発表させた。その後、討論への発展も目指した。
C	油脂類と脂質に 詳しくなろう	「欧州が前向きな 『脂肪税』って何?」 朝日新聞の記事+挿絵 2011年10月17日付	油脂類に含まれる栄養素について教科書に基づいて理解させた後、新聞記事を読ませて、ワークシートを用いて記事にある脂肪税の計算をさせた。
D	油脂類と その主な栄養素	「欧州が前向きな 『脂肪税』って何?」 朝日新聞の記事+挿絵 2011年10月17日付	導入で日本・豪州・米国の家族が1週間に消費する食糧の写真を用いて比較させ、脂質を多く含む食品の摂取状況を把握させた。そして、油脂類に含まれる栄養素について教科書に基づいて理解させた後、新聞記事を読ませて、脂肪率・脂肪税について考えさせた。
E	身近な バリアフリー	①「駅93%段差解消」 日本経済新聞の記事+写真 2011年10月12日付 ②「耳不自由でも みんなと映画」 読売新聞の記事+写真 2011年10月17日付 ③「バリアフリー 観光ツアーの実験」 朝日新聞の記事+写真 2011年9月30日付	まず、導入で新聞記事①を読んでキーワードを探させた。その後、バリアフリーとは何か、その意味を確認する発問をしたうえで、ワークシートを用いて、家の中でできるバリアフリーの事例を考えさせ列挙させた。そして、挙げた事例を家の空間別にグループ分けさせた。 次に、②③を読んで、内容確認の発問などによって、室内に限らないバリアフリー化の広がりを感じさせた。その後は、ユニバーサルデザインへと発展する計画であった。

表 1-2 受講生が作成した新聞活用による授業案の概要（続き）

受講生	テーマ	活用した新聞の箇所	授業の進め方
F	肌着の機能	「吸湿発熱素材の 女性下着」 日経産業新聞の記事+写真 2011年10月5日付	導入に新聞記事を使用し、下着メーカー各社から発熱性肌着が発売されていることを確認させた。その後、肌着の機能についてグループで話し合いをして発表させた。さらに、被服気候の話題へと発展する計画であった。
G	減塩を知り 実践しよう	「減塩ライフで 健康長寿」 朝日新聞の記事+写真 2011年10月16日付	減塩という言葉のイメージを出させる導入の後、シンポジウムの記事にある4人のシンポジストの記事を学習者に別々に割り振り、担当記事を互いに説明させた。その後、塩が身体に及ぼす影響について別資料をもとに学習を進めた。
H	行事食を考えよう	「お彼岸 家族つながる 思い出のおはぎ」 読売新聞の記事+写真 2011年9月4日付	おせち料理・雑煮の写真をもとに行事食の導入をした後、記事を読んで内容確認をした。そして、生徒各自に思い出のある行事食をエピソードとともに考えさせ、ワークシートに書き出させ小グループ内で発表させた。その後、小グループ内でどれかの行事食を決めて、それについて詳しくまとめて模造紙に書き出しクラス全体に発表する発展を計画させた。

模擬授業後の相互コメントでは、受講生が皆、授業案の良い点と改善点を的確に指摘していた。各自が自分の授業案を十分に検討したからこそ、他者の授業案にも真剣に向き合うことができたものと思われる。また、他者の新聞活用の仕方を知ることによって、活用案のアイデアが増えて参考になったことが、振り返りの記述から示唆された。

教員養成課程の授業科目内で、このように積極的にNIE授業案を作成・検討し、授業の実施を練習する取り組みを行っていくことによって、NIE授業に自信を持って臨める教員を多く教育現場に送り出すことができよう。このような活動を行う機関がまだまだ多くないと思われることから、そのプログラム作りをいかにすべきかが今後の課題であろう。

5. まとめ

本稿では、新しい学習指導要領で取り上げられるようになった新聞活用教育（NIE）について、教員志望者を育て教育現場に送り出す側である、大学の教員養成課程の側から、今後いかなる対応ができるかを検討した一端を述べた。この分野はまだ緒についたばかりである。言語力の育成や、思考力・判断力・表現力の育成などの新たな教育のねらいを達成し指導できるような教員を育成するために、さらなる検討をしていきたい。

6. 文献

- 朝日新聞社 2011 『新聞を授業に活用する』 朝日新聞社
- 福井 駿・庄本 恵子・宛彪 2012 社会科NIE 授業を实践できる教員養成用大学講義計画の開発研究, 日本NIE学会誌, 7, 43-52.
- 平石 隆敏 2008 シンポジウム：教員養成課程でのNIE入門講座から, 日本NIE学会誌, 3, 95-97.
- 平石 隆敏 2007 中学校NIE授業との連携による「総合演習：NIE入門講座」, 京都教育大学教育実践研究紀要, 7, 85-94.
- 石原 舞・西尾 敏正 2011 新聞社と大学が連携したNIE講座－愛知教育大学における免許更新講習を事例に－, 探求, 22, p. 39-45. 愛知教育大学社会科教育学会
- 影山 清四郎 2008 まえがき 日本NIE学会(編) 『情報読解力を育てるNIEハンドブック』 明治図書, p.3.
- 柏崎 秀子 2009 省察できる教師を目指したメタ認知能力の育成の試み－模擬授業の設計と主体的な学びの過程の省察－, 実践女子大学文学部紀要, 第51集, 36-46.
- 柏崎 秀子 2010 言語力育成を目指すこれからの教育の探究－方策の分析にみる方向性と課題－, 実践女子大学文学部紀要, 第52集, 48-59.
- 柏崎 秀子 2012 教職課程における主体的な学びと言語力育成－ポートフォリオによる自己評価の変容－, 実践女子大学文学部紀要, 第54集, 35-44.
- 前田 稔・徳田 悦子 2012 学校図書館司書教諭の授業を核とする教員養成大学における新聞活用教育：モデルカリキュラムの開発・実施と評価, 学校図書館学研究, 14, 63-76
- 三上 久代・三上 勝夫 2008 新聞社によるNIEの実際, 北海道教育大学紀要 教育科学編 58(2), 133-145
- 文部科学省 新学習指導要領・総則「教育課程編成の一般方針」
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/index.htm (2012年10月28日検索)
- 日本NIE学会(編) 2008 『情報読解力を育てるNIEハンドブック』 明治図書
- 日本新聞教育文化財団NIE委員会 2006 2005年度「NIE効果測定調査」結果報告 日本新聞教育文化財団
- 日本新聞協会 教育に新聞を <http://www.nie.jp/about/> (2012年11月1日検索)
- 土屋 武志・服部 賢・原田 紀保・市川 正孝 2010 NIEを活用した教員免許更新講習, 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 13, 31-36.
- 山村 靖彦 2011 福祉教育における「NIE」の実践に関する考察－保育士養成の観点から, 別府大学短期大学部紀要, 30, 11-24.